

あなたと博物館

松本市立博物館ニュース No.229 2020.7.1



【会期】7月4日(土)～8月10日(月・祝)
松本の七夕2020

松本の七夕には、軒先に飾る「七夕人形」、行事食の「ほうとう」「七夕まんじゅう」など、全国的にも珍しい風習が残されています。この松本地方独特の七夕の風景を、市内の博物館6館で連携して紹介します。

- 松本市立博物館
- 松本市はかり資料館
- 窪田空穂記念館
- 重文馬場家住宅
- 安曇資料館
- 松本市歴史の里

もくじ

- 誌上博物館 ◇ 北沢喜代治『鵠凍えず』の表現を分析的に読み開く……………2-3
- 博物館TOPICS ◇ 収蔵資料大公開展「武士の世界」に寄せて……………4-5
- 博物館TOPICS ◇ 山と自然博物館特別展「信州の蝶とその多様性～チョウ類研究家、浜栄一氏の軌跡～」…5
- 博物館のノートから ◇ 古代人に挑戦！考古博物館の体験学習/ひとの動き……………6-7
- ガイドコーナー ◇ はんでんぼく……………8



北沢喜代治『鶺鴒凍えず』の表現を分析的に読み開く

1 はじめに

北沢喜代治は、明治39年（1906）長野県須坂町で生まれました。大正13年（1924）に松本高等学校へ入学、卒業後は東京帝国大学へ進学しました。その後は富山県での教諭を経て、昭和15年に松本高等女学校（現：松本蟻ヶ崎高等学校）の教諭となりました。退職後は松本市市議会議員を務め、また、松本市で文芸雑誌『屋上』を発行しました。



北沢喜代治(旧制高等学校記念館所蔵)

今回は松本市に縁の深い作家・北沢喜代治の代表作である小説『鶺鴒凍えず』の表現を分析的に読み開きます。

2 『鶺鴒凍えず』のストーリー/プロットについて

ロシア・フォルマリズムと呼ばれる文芸理論の中に、「ストーリー/プロット」という考え方があります。小説で語られる出来事の総体を、時系列・因果関係にそって並べたものを「ストーリー」言い、その呈示のされ方を「プロット」と言います。『鶺鴒凍えず』をストーリー/プロットの考え方をいながら読んでいきます。

2-1 『鶺鴒凍えず』のストーリー

この物語の主人公であるすみ江は、幼い頃、松本市で母親と母親の情夫に、芸者屋へ奉公に出されました。そして、14、15歳のときには、芸者として二人を養うようになります。長野、新潟、富山などでの芸者生活は、運命のさだまらない幸薄いものでした。こうした中で、母親が実母でないことを知り、すみ江は衝撃を受けます。しかし、すみ江は、母親の素性を知っても、母親と別れることはありませんでした。太平洋戦争が始まったのち、すみ江は結婚しますが、その結婚生活も幸せなものではありませんでした。その後のことはすみ江にとって「どんなふうに語っていいのか、その方法が分からない」ことであり、多くは語られずに、この物語は終わりを迎えます。

2-2 『鶺鴒凍えず』のプロット

『鶺鴒凍えず』の冒頭には、語り手であり、中年となった現在のすみ江が登場し、自身の半生について語るという手法をとっています。

つまり、起こった出来事（ストーリー）の順に記述されるのであれば、結末に登場するはずの現在のすみ江が、冒頭に登場しているのです。

では、なぜそうしたプロットが採用されたのでしょうか。『鶺鴒凍えず』の冒頭では、現在のすみ江が次のように話しています。

もし神様というようなものがあるなら、わたしはわたしの、ずっとこれまで生きてきた道を、その前に膝まづいて、申し上げたいのです。[中略]わたしは小説というようなものは、余り好きではありません。それは作りごとだと思うからです。それよりも、たった一度しか生きられない人生を、どのように生きてきたか、そういったことを、神様の前に報告するような、そんなお話をわたしはお聞きしたいのです。百篇、千篇の小説よりも、わたしには、そういった一つのお話の方が、しみじみと人生を考えさせてくれるからです。

小説内の登場人物であるすみ江が、「小説」を「作りごと」だとし、「たった一度しか生きられない人生を、どのように生きてきたか、そういったことを、神様の前に報告するような、そんなお話を」したいと述べているのは矛盾しています。しかし、このような内容を、敢えて物語の冒頭ですみ江に語らせることで、通常ならば「作りごと」である「小説」（『鶺鴒凍えず』）を、なるべく「作りごと」として、読者に読ませないようにした（つまり、『鶺鴒凍えず』を〈作りごとでないもの〉として読者に読ませようとした）のではないかと考えられます。

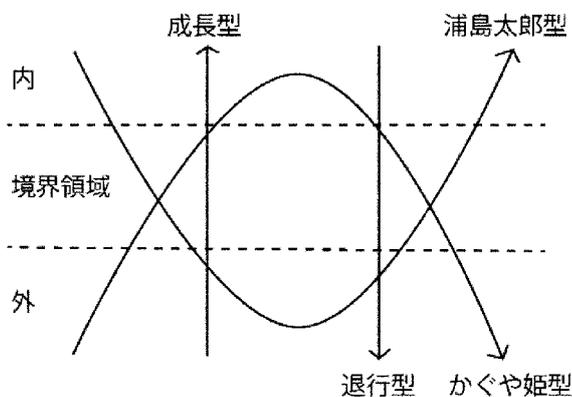
3 『鶺鴒凍えず』の物語の型

島田杏花「『鶺鴒凍えず』について」では、『鶺鴒凍えず』を「モデル小説だと聞いたことがある」とし、北沢のモデル小説のルールの一つとして「時効になったことにスポットをあてて一つの世界をつくること」を挙げています。つまり、『鶺鴒凍えず』ですみ江の人生の前半しか語られなかった理由は、〈人生の後半についてはまだ時効になっていなかったからである〉としています。

しかし、「時効になったことにスポットをあてて一つの世界をつくる」という北沢の意図に沿った読み方をするのではなく、『鶺鴒凍えず』を物語の型にあてはめて考えるとどのように分析できるでしょうか。物語の型については、石原千秋『読者はどこ

に『読者はどこにいるのか』内で、次の5つに分類されると述べられています。(図)

1つ目は浦島太郎型で、地上のある村(内)から海の中の竜宮城(外)に出かけて行って、再び地上(内)に帰ってくる物語です。2つ目はかぐや姫型で、月(外)から来たかぐや姫が竹から生まれて地球上(内)で生活し、再び月(外)に帰って行く物語です。3つ目は成長型で、物語では最も多い型であり、子ども(外)が大人(内)へと成長するものが一般的です。4つ目は退行型で、成長型の逆の型であり、例えば大人(内)が子ども(外)になったり、都会(内)から田舎(外)へ移動したりする物語です。



そして、図には書かれていませんが、5つ目の型として、「オープン・エンディング」という型があります。これは、はっきりとした結末がなく、この後どうなるかが読者に告げられていないまま終わる物語のことをいいます。すみ江の人生の後半がどうなったか語られていないまま終わる『鶴凍えず』は、オープン・エンディングにあてはまるといえます。

『読者はどこにいるのか』では、オープン・エンディングについて、「日本では明治40年頃の自然主義文学最盛期に確立された型だ」とし、次のように述べられています。

物語は「はじめ」で提示された課題が「終わり」で解決することで物語となっている。しかし自然主義文学は、日常生活はそんなうまい具合に結末を迎えるわけではないし、物事が解決するわけでもないと考えた。そこで、物語を作りすぎることを批判して、日常生活を何気なく切り取ってきたようなはっきりとした結末のない小説を好んで書いた。それが結果としてオープン・エンディングという技法の確立につながったのである。

つまり、オープン・エンディングを用いることで、作りすぎない小説を書くことができるということです。これは、2で述べた『『鶴凍えず』を〈作りごとでないもの〉として読者に読ませようとした』という考え方とも一致します。

よって『鶴凍えず』は、〈物語を作りすぎず、日常生活を何気なく切り取ってきたような物語である〉と、読者に感じさせる工夫がされた小説であるといえます。

4 まとめ

3でも述べましたが、島田杏花「『鶴凍えず』について」では、『鶴凍えず』ですみ江の人生の前半しか語られなかった理由を、〈人生の後半についてはまだ時効になっていなかったからである〉としていました。このことを北沢のモデル小説のルールの一つであるとし、表現の工夫という観点からは分析されていませんでした。

また、島田杏花「『鶴凍えず』について」の他に、『鶴凍えず』先行研究として挙げられるものに、三木ふみ『北沢喜代治一人と作品』があります。『北沢喜代治一人と作品』では、『鶴凍えず』の表現の工夫について少し触れられていますが、それは「会話の入れ方」や「自然描写の取扱い」という面からであり、「ストーリー/プロット」と、「物語の型」という観点からは分析されていませんでした。

今回は、先行研究では触れられていなかった、「ストーリー/プロット」と、「物語の型」という観点から『鶴凍えず』を分析することで、『鶴凍えず』は〈物語を作りすぎず、日常生活を何気なく切り取ってきたような物語である〉と、読者に感じさせる工夫がされた小説であると導き出すことができました。よって、『鶴凍えず』の表現の工夫を、新たに読み開くことができたと考えています。

(松本市立博物館 学芸員/石原花梨)

○この論文を書くにあたり、神奈川大学教授 松本和也先生にご指導いただきました。この場を借りて感謝の意を表します。

○参考文献

- ・北沢喜代治『鶴凍えず』(信州書房発行、1965)
- ・三木ふみ『北沢喜代治一人と作品』(「屋上」の会発行、2007〈非売品〉)
- ・島田杏花「『鶴凍えず』について」(『屋上』48号、1981)
- ・松本和也『テキスト分析入門』(ひつじ書房発行、2016)
- ・石原千秋『読者はどこにいるのか』(河出書房新社発行、2015)

松本市立博物館 Tel.0263-32-0133

収蔵資料大公開展「武士の世界」に寄せて

1 はじめに

当館では令和3年度からの一時閉館に伴い、100年以上かけて収集してきた資料の中から、「武士の世界」¹、「博物館の逸品Ⅰ～農耕用具コレクション～」²、「生活と色～暮らしを彩る意匠～」³、「博物館の逸品Ⅱ～民間信仰資料コレクション～」⁴、「年中行事」の5テーマに分けて大公開します。

第1弾の「武士の世界」は甲冑を中心⁵に展示します。ここでは、甲冑とはどんなものなのか簡単に解説したうえで、今回展示する当館の甲冑の見所を紹介します。

2 日本の甲冑について

甲冑とは、頭部を保護する冑、胴部を保護する甲から成る武具です。

戦国時代を舞台とした大河ドラマや映画などで、武将たちが戦の際に着用しているシーンを見たことがあるのではないのでしょうか。

甲冑の様式は様々で、大鎧^{おおよろい}、胴丸^{どうまる}、腹巻^{はらまき}、腹当^{はらあて}、当世具足^{とうせいぐそく}などがあり、「鎧」や「兜」などと表現されることもあります。

甲冑の歴史は古く、起源ははっきりとはしていませんが、大きな転換期が2度あったといわれています。1つ目は、平安時代末期¹の大鎧の登場。騎射戦を想定したつくりが特徴です。2つ目は、桃山時代に完成したと推測される²当世具足の登場です。徒歩戦向きの胴丸や腹巻の要素が加わり、かつ体が隙間なく包まれるようになりました。このように、戦い方に合わせて進化を遂げた甲冑からは、防御力向上や戦いやすさを追及した、機能面での工夫を見ることができます。

その一方で、装飾的にも配慮がなされ、美術・工芸の面でも優れた甲冑があります。甲冑はいわゆる戦闘着のため、殺伐としたイメージをお持ちの方も多いとは思いますが、美しさも兼ね備えているのです。

3 松本市立博物館の甲冑

当館で収蔵している甲冑の多くは、江戸時代に松本を治めた藩主やその家臣（藩士）たちが着用したとされるものです。甲冑の製作年代を特定するのは難しく正確な年代は定かではありませんが、そのつくりから、当世具足の登場以降のものだと考え

られます。

例えば、当世具足の登場以降、集団戦が主流となる中で、敵味方を判別するために、武士たちは背中に指物（旗など）を差しました。そのため、指物を差すための装備³が、胴の後ろに設けられるようになります。また、蝶番が使用されるようになったのも当世具足の特徴の一つです。これは、胴部を保護する胴や腕部を保護する籠手^{かごと}などに使われました。当館で収蔵している甲冑の多くに、これらの特徴があります。

4 甲冑の見所—戸田家葵紋甲冑の兜と胴—

当館では松本藩ゆかりの甲冑を収蔵しています。ここでは、その中でも特に見応えのある資料、藩主・戸田家に伝わる葵紋甲冑を、兜と胴に分けてご紹介します。

まず頭部を守る兜についてです。“兜”と聞くと鍬形を連想される方が多いのではないのでしょうか。鍬形は鎌倉時代や室町時代に主流だった、兜の前面を飾る

前立物の一種でした。葵紋甲冑は、この前立物が徳川氏の家紋「葵の紋」を象ったものになっています。

また兜表面には、縦に無数の筋が通っているのが見られます。この形の兜を筋兜^{すじかぶと}といいます。筋兜は、馬に乗って弓を射る騎射戦から、歩いて刀や槍などで戦う徒歩戦が主流になる中で、改変され生まれたものと考えられています。それまでの兜は星兜と呼ばれ、兜の表面に突起物がありました。しかし、これでは、刀や槍が引っ掛かりやすくなってしまいうため、突起物を無くし筋を入れることで、滑りやすくさせたといわれています。



戸田家葵紋甲冑



鍬形の兜

¹笹間良彦『甲冑のすべて』（PHP研究所、2003）142頁

²1と同書 131頁

³ガツタリ・受筒・待受と呼ばれるもの

⁴染め章。金具廻りなど各所に使用される。

⁵部材の上端の中央を残し両側を低く削った形

次に胴部を守る胴についてですが、なんといっても前胴の全面に蒔絵で施されたと思われる、獅子に牡丹模様が美しいです。この模様は絵章^{えしやう}にも採用され、至るところに見ることができます。どこにどのくらいこの模様があるか、探しながら見てみるのも面白いと思います。また、前胴には鎬^{しのぎ}が入っているのも特徴で、海外の甲冑の要素を取り入れた南蛮胴に似た様式です。

この他にも、ここでは語り尽くせないほどの見所がたくさんあります。葵紋甲冑は、今回の企画展の目玉になりますので、ご来館いただいた際はぜひじっくりとご覧ください。

5 おわりに

これまで述べてきたように、甲冑^{りよう}1領には“たくさん見所”が隠れています。

今回の展示では、その見所に少しでも多く気付いていただけるよう、甲冑を部位ごとに解剖して解説

を行う予定です。あまり甲冑に馴染みのない方でも、部位解説をご覧くださいながら、甲冑1領と向き合っていたいただければ、より面白さを感じていただけたと思います。

1領ごとに異なる色合いや、それぞれの部位に施された意匠、機能性を確保するためのつくり込みなど、甲冑があわせ持つ様々な面をお楽しみいただければ幸いです。また、「収蔵資料大公開展」は、新博物館の移転・新築に伴う閉館前、最後の企画展になりますので、ぜひご来館ください。

参考文献

- ・ 笹間良彦『甲冑のすべて』（PHP 研究所、2003）
- ・ 山岸素夫・宮崎眞澄『日本甲冑の基礎知識』（雄山閣、2006）
- ・ 近藤好和『武具の日本史』（平凡社、2010）

収蔵資料大公開展「武士の世界」

- [会 期] 7月11日^土～8月23日^日
- [会 場] 2階特別展示室
- [料 金] 通常観覧料

山と自然博物館 Tel.0263-38-0012

山と自然博物館特別展「信州の蝶とその多様性～チョウ類研究家、浜栄一氏の軌跡～」

蝶の生息種数（多様性）が全国で最も多いと言われている長野県の蝶たちについて、松本市にお住まいだった蝶類研究家、浜栄一氏の標本コレクションを用いて紹介します。



高山蝶の1種クモツマキチョウ

自然豊かな長野県は草原・森林・高山などの様々な環境が広がっています。そして草原には草原の蝶、森林には森林の蝶、と様々なチョウが生息しています。特に高山に生息する蝶たちは長野県を代表する蝶たちといえるでしょう。

その信州の蝶たちについて長年にわたり調査・研究を行ってきたのが浜栄一氏です。

浜氏は諏訪市生まれ。長野県職員として働くかわらアマチュアの蝶類研究家として、自宅のあった松本市域を中心に長野県をフィールドとして採集・研究を行っていました。特に蝶の生態について野外で事細かく観察し、40冊以上にのぼる研究ノートを残しています。平成29年（2017）に亡くなり、自身の標本や資料が子どもたちへの教育活動に利用されることを望んでいた浜氏の遺志を受け、それらは山と自然博物館に寄贈されました。

浜氏のコレクションは、昭和16年（1941）から

平成20年にかけて長野県内で集められた蝶で、その数は146種16,187個体、標本箱にして256箱にのぼります。これは、長野県の蝶をほぼ網羅するもので、当館では種ごとの標本に解説を添えて、浜氏が撮影した生態写真と共にご覧いただけます。また、標本箱の中には、生息地の衰亡や特殊な状況での採集記録など、浜氏が書いたメモが入っていて、浜氏の研究者としての一面が伺える資料でもあります。壁一面に広がる圧巻の標本の数々を、どうぞご覧ください。



このコレクションの他にも、浜氏が残した研究ノートや点描画、携わっていた自然教育・保護活動についての紹介や、記念品が貰えるクイズを実施しています。

特別展「信州の蝶とその多様性～チョウ類研究家浜栄一氏の軌跡～」

- [会 期] 開催中～9月27日^日
- [会 場] 2階常設展示室
- [料 金] 通常観覧料

古代人に挑戦！ 考古博物館の体験学習

コロナ禍を受け、考古博物館は3月から5月まで臨時休館を余儀なくされました。例年であれば4月から5月にかけて（春の遠足や学外見学のシーズンに重なるため）松本市内の保育園・幼稚園、小学生の子どもたちが考古博物館を訪れ、春の賑わいを博物館にもたらせてくれていました。当館を訪れた子供たちに人気なのは「古代体験学習」です。中でも、火おこし・勾玉づくりは大好評で、この体験学習を目的に当館のリピーターになってくれる子どもたちが続出するほどです。



『令和元年5月 幼稚園の見学』
考古博物館の玄関前でマイギリ式の火おこしを見学する幼稚園児。考古博物館職員の火おこし実演の後、幼稚園の先生による実演を行っています。

今年は、考古博物館へ来館して体験学習をしてもらう機会が減ってしまっていますが、少しでも古代の生活への理解を深めていただくため、本誌面で考古博物館の火おこし体験学習をご紹介します。

1 体験講座・火おこしに挑戦

むかしの火おこし技術を実践する体験学習です。火おこしにはいくつかの方法がありますが、考古博物館では摩擦法による火おこしを体験することができます。ちなみに、代表的な火おこしの方法には次のようなものがあります。

- ・火打ち法：石と金属をぶつけて火花をだし、火花を火口で受け止めて火種にする。（火打石・ライターなど）
- ・摩擦法：木や竹をこすりあわせるときに生じる摩擦熱で発火した木粉（もくふん）を火種にする。（モミギリなど）
- ・光学法：太陽の光をレンズや凹面鏡で集めて発火させる。（虫眼鏡、オリンピック聖火の採火など）
- ・電気法：電気をスパークさせて発火させる。（ガスコンロなど）

考古博物館で体験できるのは、摩擦法の中でも

「マイギリ式」という方法の火おこしです。この方法は、古代の日本では使われていなかったようですが、火をおこしやすいので、摩擦による火おこし技術にふれてもらうため学習体験に取り入れています。



『マイギリ式火おこしの道具一式』
火をおこしやすいから体験学習ではマイギリ式の火おこしを採用しているが、古代日本の火おこしは、縄文時代・弥生時代をつうじてモミギリ式が主流でした。日本で最古の発火具は、北海道の忍路土場遺跡で見つかっています。

火おこし体験学習をした子ども達から「火はいつごろから使われていたの？」という質問や「火を使うことで人の生活は変わったの？」という疑問の声を聞くことがあります。実際に自分で火おこしを体験することで、火おこしの技術を身近に感じるとともに、火に対する疑問が生まれたのでしょうか。これらの質問には次のように答えています。「火の最初の利用は170万年前のヒト（猿人）に遡るといわれています。落雷や山火事など、自然災害でおきた火を利用していました。食べ物を焼き、獣を遠ざけ、寒さから身を守ることができる火は、厳しい自然を生き抜くために大きな助けになったことでしょう。人が確かに火を使った例として、中国の洞窟で火を燃やした跡が見つかっています。50万年前のことです。自由に火を使うようになったのは5万年前の旧石器時代の人びと



『令和元年12月 出前講座（波田小学校）』
学校が遠隔地にあり考古博物館への来館が難しい場合などは、博物館の職員が学校に向向いて出前講座をおこないます。波田小学校では体験学習で火をおこしたのち、その火を使ってマシュマロやワインナーを焼いて食べました。

からと考えられています。』

現代日本を生きる私たちにとって、火は少し遠い存在になってはいないでしょうか。ついこのあいだまで、火は私たちの身近にありました。掘りごたつに火鉢、囲炉裏、落ち葉焚き、風呂もまきガマで沸かしていました。しかし、最近では「マッチで火をつけた経験すらないという子どもたちが相当数いる。」という話を聞きます。そんな子供たちにとって「古代の火おこし」はたいへん魅力的に感じられるのでしょうか。

2 体験学習への誘い

体験学習は出前講座もおこなっています。学校や公民館などに考古博物館の職員が出向いて講座を実施します。博物館でおこなう体験学習のプログラム同様、歴史についてお話をしたり、古代日本の紹介をしたりします。体験を交えた学習は、歴史や古代の生活をより身近に感じ、関心を高めることが期待できます。また、体験道具の貸し出

しも行っていますので、いろいろな学びの場に博物館を活用していただければと思います。

(考古博物館 学芸員／一ノ瀬幸治)



『令和元年 学都フォーラム 勾玉づくり 体験講座』
参加者は考古博物館で実施する体験学習講座よりも年齢層が低め。未就学児や小学校低学年の子供たちが多く参加しました。1時間以上かけて、自分だけの勾玉を一生懸命作っていました。

ひとの動き

4月1日・15日付で、次のように職員の転入・転出等がありました。()内は所属。

転入・新規採用 よろしくお願ひします。

課長補佐	百瀬也寿之	(美術館→市立博物館)
係長	小原 稔	(松本城管理事務所→市立博物館)
主査	福沢 佳典	(生涯学習課→基幹博物館建設担当係)
主事	宮下 慶祐	(農政課→馬場家住宅)
主事	中澤 聡	(文化財課→市立博物館)
主事	弘中 奏宇	(資産税課→基幹博物館建設担当係)
会計年度任用職員	手島 学	(松本城管理事務所→民芸館)
会計年度任用職員	小林 駿	(四賀化石館)

課内異動 改めてお願ひします。

課長補佐	山村 里佳	(市立博物館→旧開智学校校舎)
主事	石原 花梨	(旧制高等学校記念館→市立博物館)
会計年度任用職員	岡野 真樹	(基幹博物館建設担当係→旧山辺学校校舎)
会計年度任用職員	高山 峻一	(市立博物館→旧制高等学校記念館)
会計年度任用職員	高木美保子	(四賀化石館→基幹博物館建設担当係)

転出・退職 お世話になりました。

係長	土屋まつえ	(市立博物館→高齢福祉課)
主査	赤羽 浩行	(基幹博物館建設担当係→障害福祉課)
主査	澤柳 秀利	(馬場家住宅→文化財課)
主事	小暮 洋介	(市立博物館→こども育成課)
嘱託	永井三香子	(旧山辺学校校舎→教育政策課)
嘱託	栗原 信行	(旧開智学校校舎→退職)
嘱託	田中有規子	(民芸館→退職)



【第9期市民学芸員養成講座】

松本のこと、もっと知りたい人集まれ!

新型コロナウイルスの影響で遅くなりましたが、今年も市民学芸員養成講座を開講します。今回の養成講座では、「あめ市」をテーマに、松本の歴史・文化について自分で学び、人に伝えるための実習を行います。9月に初回の講座を実施します。

日時 初回講座：9月19日(土)
午前10時30分～午後4時00分
会場 松本市立博物館 2階講堂
対象 年間7回の講座を受講でき、野外での調査等に参加できる方
定員 15人
その他 【今後の予定】
9月19日(土)10月17日(土)、
11月28日(土)、12月19日(土)、
1月はあめ市の日に開催、2月27日(土)、3月13日(土)
申込み 8月7日(金)午前9時から電話で市立博物館へ



令和元年度市民学芸員養成講座

旧開智学校校舎から ☎0263-32-5725

企画展「開智学校の体育と保健」

昔の開智学校の体育や保健の様子を紹介します。今と違った不思議な体操やダンス、明治時代の学校での伝染病対策などに関する資料を展示します。

会期 7月18日(土)～9月22日(火・祝)
会場 国宝 旧開智学校校舎
料金 通常観覧料(高校生以上400円、小・中学生200円)

松本民芸館から ☎0263-33-1569

企画展「民芸のはじまり 丸山太郎が愛した朝鮮の美」

松本民芸館の創館者丸山太郎が愛した、朝鮮の木工品ややきもの、金工・石工品などおよそ100点を展示します。

会期 3月17日(火)～11月23日(月・祝)
※会期を延長しました
会場 松本民芸館
料金 通常観覧料(大人310円、中学生以下無料)

旧山辺学校校舎から ☎0263-32-7602

昔の遊び道具作り教室

竹を使った昔のおもちゃを作ります。
日時 7月5日(日)午前9時～正午
会場 教育文化センター 206会議室
料金 無料
定員 25名
対象 全年齢(小学校低学年以下は保護者同伴)
講師 荒田直氏、青柳秀人氏
持ち物 軍手・鉛筆・30cmものさし(必要な方は水筒・手ぬぐい等)
申込み 6月16日(火)午前9時から電話で旧山辺学校校舎へ

考古博物館から ☎0263-86-4710

古代まるごと体験!

古代の生活を体験してみよう!詳細はまる博HPをご覧ください。
日時 8月8日(土)午前10時～正午
会場 松本市立考古博物館
料金 500円
定員 電話による申込みで、先着10名
対象 小学生以上(小学校低学年のお子様は保護者の付添が必要です)
申込み 7月14日(火)9時から電話で考古博物館へ

重文馬場家住宅から ☎0263-85-5070

七夕人形づくり講座

製作キットを使って七夕人形を手作りしてみませんか。
日時 7月7日(火)、8月7日(金)
いずれも午後1時30分～3時30分
会場 重要文化財馬場家住宅
料金 1,000円と通常観覧料
定員 先着10名
申込み 各開催日前日までに電話で馬場家住宅へ

はた織り体験教室

日時 7月25日(土)、8月22日(土)
いずれも午前9時30分～11時30分
会場 重要文化財馬場家住宅
料金 1,010円
対象 小学校高学年以上
定員 3人
指導 染織の会
申込み 各月5日から電話で馬場家住宅へ

布ぞうり作り体験教室

日時 8月29日(土)、9月19日(土)、10月17日(土)
いずれも午前10時～午後3時
会場 重要文化財馬場家住宅
料金 1,810円
対象 小学生以上
定員 10人
講師 秋山啓子氏
申込み 各月6日から電話で馬場家住宅へ

時計博物館から ☎0263-36-0969

夏期特別展「時計の部品展」

時計の部品や修理道具など、普段見ることのできない時計の裏側について紹介します。
会期 7月23日(木・祝)～9月6日(日)
月曜休館 休日の場合はその翌日
※8月11日(火)は臨時開館
会場 松本市時計博物館 3階企画展示室
料金 通常観覧料(大人310円、小中学生150円)

歴史の里から ☎0263-47-4515

模型で見る歴史的建造物

歴史の里に寄贈された工女宿宝来屋等の模型製作の方が、これまでに制作した建造物の模型を集め、展示します。
会期 7月21日(火)～10月4日(日)
会場 歴史の里 旧松本区裁判所庁舎
料金 通常観覧料(大人410円、中学生以下無料)
※年間行事予定では、当初4月から開催予定でしたが、新型コロナウイルスの影響により、会期を変更します。

親子はた織り体験講座

親子で「裂き織り」を体験してみましょう。
日時 7月18日(土)、8月22日(土)
いずれも午前10時～正午と午後1時～3時
料金 1組1,000円(材料費等)
定員 午前、午後とも各5組
対象 小学生以上の親子2人1組
講師 川上裕子氏

親子草木染め体験講座

7月はバンダナ、8月はハンカチの藍染めをします。
日時 7月19日(日)、8月8日(土)
いずれも午前9時30分～正午
料金 1組1,500円
対象 小学生以上の親子2人1組
定員 各5組(材料費等)
講師 歴史の里 染めの会

親子みすず細工体験講座

すず竹でペン立てを作ります。
日時 8月9日(日)午前9時30分～正午
料金 1組1,500円(材料費等)
定員 5組
対象 小学生以上の親子2人1組
講師 歴史の里 みすず細工の会
持ち物 タオル、エプロン

蚕の繭から糸をとってみよう!

蚕の繭1つからどれくらいの長さの糸がとれるか、実際に手作業で糸をひいて測ります。
日時 7月23日(木・祝)午前9時30分～正午
料金 通常観覧料
定員 5名
対象 小学生以上(中学生以下は保護者同伴)
持ち物 タオル、エプロン

○共通事項

会場 歴史の里 展示・休憩棟
申込み 8月の親子草木染め体験講座・親子みすず細工体験講座は7月21日(火)、その他は各開催月の5日午前9時から電話で歴史の里へ

あとがき

新型コロナウイルス感染症の影響で長らく休館していた博物館も、感染予防の対策をとり、やっと開館することができました。今まで通りにはいきませんが、多くのお客様に博物館を訪れていただきたいと思います。(T・H)

あなたと博物館 No.229

発行年月日/令和2年7月1日
編集・発行/松本市立博物館
〒390-0873 松本市丸の内4番1号 Tel.0263-32-0133
URL : http://www.matsuo-haku.com/
e-mail : mcmuse@city.matsumoto.lg.jp



印刷 川越印刷株式会社